学問と文化

中世ペストのもたらしたもの

「大遷移」の時代

構造転換加速化した４度の波

大貫　俊夫

1347～51年にペスト（黒死病）がヨーロッパを襲い、最近の研究では人口の約半分が命を失ったと言われている。日本で中世ヨーロッパの歴史が話題になることはめったにないが、新型コロナウイルスが拡大するなか、この中世のパンデミックがしばしば取り上げられるようになった。

ペストが流行したことで、社会・経済が激変して資本主義が生まれ、キリスト教信仰が揺らぎ人間中心のルネサンスが到来した、という具合である。今回のコロナ禍を機に社会システムが大きく変わる、あるいは変わるべきだという意見とともにこのペストが言及されることもある。

しかし歴史は大変複雑なものである。中世の封建社会は14世紀半ばのたった1回のパンデミックで瓦解しなかったし、キリスト教信仰はむしろ強まったと言える。これまでの研究は、当時の変化はもっと長いスパンで理解しなければならないことを教えてくれる。

おおぬき・としお
1978年生まれ。東京都立大学准教授（西洋中世史、中世宗教史）。ドイツ語の著作のほか、訳書に『中世共同体論　ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人』

13世紀末から始まった危機

それでは中世の「危機」はいつ始まったのかというと、すでに13世紀末には始まっていたという理解が有力である。1270年頃に太陽が活動停滞期に入ると、ヨーロッパ各地で天候不順による飢饉、さらには地震、蝗害（バッタによる食害）、降雹などが起こった。そうした環境下で、ペスト菌はヨーロッパに到来したのである。中世環境史の専門家キャンベルは、13世紀末から15世紀までを「大遷移」の時代と呼び、大きな時代の流れの中に14世紀半ばの大ペストを位置付けている。

著名な人文主義者ペトラルカは、大ペストから20年後に著した書簡に「（疫病は）もう過ぎ去ったと思ったまさにその時に、再びやってきて、束の間の幸せを送る我々を欺いて再度襲いかかる」と記している。また、同じ書簡で疫病以上に地震について多くを語っているのが印象的だ。過去を振り返ってみたとき、彼の心に深く刻まれていた出来事は「あの」ペストだけではなかった。中世史家の瀬原義生は「大黒死病は、大量死を招いたが、それ自体としては、顕著な永続的影響を残さなかった」と述べる。社会はそれほど脆弱にはできておらず、人口は自然の復原力により回復が見込めたのだ。

人口停滞期に突入した欧州

しかし、結果としてヨーロッパは人口停滞期に突入する。1370年代にかけて4度のペストの波が繰り返しヨーロッパを襲ったためである。この積み重ねが歴史的に大きな意味を持つ。

それでは、社会の変化が長いスパンで生じていたとして、その中で14世紀半ばのペストが持つ意味は何か。それは、「問題の加速化」ということに尽きるだろう。農村社会は13世紀末にはすでに人口飽和に達しており、新しい技術革新もなく、食糧生産の拡大は限界に達していた。社会はすでに構造転換を必要としていたのである。こうした前提を受けて、ペストが構造転換を加速させたと考えられる。

イギリスを例にとると、それまで緩やかに上昇していた農業労働賃金が14世紀半ばに急上昇を始め、世紀の終わりに高止まりする、というデータがある。このことは、ペストのたび重なる波によって農業危機がいよいよ深刻になったことを推測させる。しかしそのかわりに、王権が国外から技術者を呼び国外産地と競合するようになっていた毛織物生産が、農村部で一気に盛んになった。この構造転換なくして、16世紀以降のイギリスの発展はなかったであろう。

この「問題の加速化」というとらえ方は、コロナ禍にある私たちにとって理解しやすいのではないか。満員電車の緩和にせよ、学校でのオンライン活用にせよ、諸問題は新型コロナが蔓延して突然降って湧いたものではなく、これまで見て見ぬふりをしてきたものである。

今、私たちにとって大切なのは、コロナを機に「世界の再定義」を丁寧に行っていくことかもしれない。酒を酌み交わしていた隣人、身構えることなく利用していた場所の意味を改めて問い、その価値を再定義する作業である。その上で、以前から積み残している諸課題を見つめ直すことが肝要であろう。

朝の風

藤原歌劇団が8月15日からの3日間、ビゼーの「カルメン」を上演した。4月末に予定していた公演が延期されたもの。新型コロナ禍による「自粛」以後初めての本格的なオペラ公演となった。

入場時や客席の感染防止対策はもちろん、オーケストラはピットの密を避けるため舞台上で演奏。合唱団は舞台奥のデッキに配置。歌手と合唱団、指揮者は全員フェースシールドを着用した。オペラは出演者が多く、歌手や合唱団から飛沫が飛びやすいだけに、入念な対策ぶり。声が伸びにくく歌いづらいだろうが、出演者の熱唱にひきつけられた。

演出は岩田達宗氏。3年前も「カルメン」を演出したが、身体的距離をとるため出演者の立ち位置が変わり、試行錯誤を重ねて上演に至ったという。公演再開にむけた関係者の苦労がしのばれた。

歌い続けるカルメン

「だが、それでも人々は歌うだろう。歌い続けるだろう。言語の壁を越え、人々の間を隔てる距離を飛び越える手段として歌い続けるだろう。そしてカルメンのように、どんな差別や抑圧や暴力にも屈しないと、歌い続けるだろう。そんなものには屈しない、と言うカルメンの歌は、新しくなる世界へ人類が船出するときの高らかな讃歌なのだ」

岩田氏の「演出ノート」に共感した。（弩）

文化通信

三浦春馬さんの基金設立を発表

7月18日に30歳で死去した俳優の三浦春馬さんが所属していた芸能事務所アミューズ（東京）は4日、「三浦春馬基金」（仮称）を設立すると公式サイトで発表しました。三浦さんの活動に関わる同社の全利益を「困難に立ち向かう人々への寄付・支援」に充てるといいます。

また、三浦さんが死去した当日の詳しい状況も報告。警察の検視などの結果、死因は自死とされましたが、一部で報道された遺書などは見つかっていないといいます。

新潮ドキュメント賞　アマゾン潜入ルポに

新潮文芸振興会は1日、第19回新潮ドキュメント賞が『潜入ルポ amazon帝国』（横田増生著、小学館）に決まったと発表しました。第19回小林秀雄賞は『心を病んだらいけないの？―うつ病社会の処方箋―』（斎藤環、與那覇潤著、新潮社）に決まりました。

映画

楽しみつつ課題に気づく

「スペシャルズ！　政府が潰そうとした自閉症ケア施設を守った男たちの実話」（仏）

ブリュノ（ヴァンサン・カッセル＝左）とマリク（レダ・カテブ）
© 2019 ADNP-TEN CINEMA-GAUMONT-TF1 FILMS PRODUCTION-BELGA PRODUCTIONS-QUAD-TEN

パリで自閉症の青少年を支援している実在の団体をモデルに、「最強のふたり」（2011年）のエリック・トレダノとオリヴィエ・ナカシュの監督コンビが、躍動感あふれる社会派娯楽作品を作り上げた。

ブリュノ（ヴァンサン・カッセル）は、自閉症児の自主性を重んじる支援団体を運営している。増える一方の子どもたちと比べて、世話をする人数は圧倒的に少なく、落ちこぼれの若者の社会復帰を目指すマリク（レダ・カテブ）の組織に手伝ってもらっている。重度の少年、ヴァランタンのケアをすることになり、遅刻ばかりの問題児、ディランが面倒を見るが…。

実際の自閉症児たちも出演し、リアルな支援の現場がテンポよく展開される。地下鉄に乗るたびに非常ボタンを押して電車を止めてしまうジョゼフを、洗濯機のCMが大好きだからと何とか洗濯機の修理工場で働かすべく奔走するエピソードなど、思わず頬が緩む場面がふんだんに登場する。

一方で厳しい現実もおろそかにはしない。認可を受けていないことで政府の検査官が執拗に調査するが、家族や病院は、ブリュノたちがいなくなったらどこが代わりを務めてくれるのかと訴える。洗濯機青年のジョゼフの母親は、以前の施設は薬漬けで、まるで死んだような表情だったと涙ながらに語る。この問題の根深さを物語る瞬間だ。

大いに楽しみながら社会の課題に気づかされる。それもまた映画の果たす役割の一つかもしれない。

（藤井克郎・映画ジャーナリスト）

11日から東京・TOHOシネマズシャンテほかで公開、順次全国で

苦しいときこそ楽しんで

「演劇の意味考えた」

「おかしな二人」10月舞台

「おかしな二人」の出演者ら＝２日、東京都内

妻に去られて一人暮らしのずぼらな男の部屋に、妻に離婚を切り出されて傷心の友人がやってきて、同居を始める…。ブロードウェー随一の喜劇作家ニール・サイモンの代表作「おかしな二人」（1965年初演）。今回女性版（1985年初演）が上演されます。10月の舞台を前に出演者らが2日、意気込みを語りました。

暑い盛りに冷蔵庫が壊れても放っておくほどずぼらなオリーブを演じるのは大地真央さん、オリーブの部屋に転がり込んだ「病的なまでにきれい好き」なフローレンスを演じるのは花總まりさん。宝塚出身の二人ですが、共演は初めてです。

さまざまなコメディー作品に出演する大地さんは「どんな作品でも、くすっと笑えるコメディー的な要素を大事に演じています。コメディーの裏にある人間ドラマを大事にすれば、結果として喜劇になる。長い間愛されてきた作品ですが、新たな魅力を作り出していけたら」と話しました。

一方コメディーはほぼ初めてという花總さん。「マリー・アントワネットなど歴史上の人物を演じることが多く、最後には死んでしまったりしているので、今回はその分まで爆発させたい」と笑いを誘い、「せりふ量が多くて今はまだ口が回らないです。コメディーは難しいですが、気負わず大地さんとのテンポ感を大事にしたい」と語りました。

演出の原田諒さんは、「日本でも何度も上演された作品、たくましく生きる姿が魅力です。今の時代に合ったものを考えたい。自粛などで、演劇をやる意味を改めて考えました。心豊かに生きるためにも、苦しい時にこそエンタメは不可欠。観客に夢の時間を提供するのが役割だと思う。劇場にいる間は心から楽しんで、現実を生きる力を得て帰ってもらえれば」と語りました。

10月8～25日、東京・シアタークリエ。出演はほかにシルビア・グラブ、芋洗坂係長ら。大阪公演あり。☎03（3201）7777（東宝テレザーブ）

読者の文芸

詩は原稿用紙に20行以内縦書き、短歌、俳句、川柳は、はがき（５首・句以内）で、表に分野の区別を朱記。二重投稿はご遠慮ください。郵便番号、住所、氏名、電話番号明記。紙上匿名は自由。あて先は　〒151－8675　東京代々木郵便局私書箱62号、赤旗学術・文化部「読者の文芸」係。メールでも投稿可　akahata-bungei@jcp.or.jp（件名に分野を明記）　掲載作に図書カード贈呈。

詩

熊井　三郎 選

秋　上野の山で

東京都　深澤　邦弘

十月　復員した父に連れられて
五月の空襲で焼かれた家の跡に
土台のコンクリートと玄関の大谷石だけ残っていた
広小路から上野の山に
ゆるい長い石段の両側に子供たちがいくつも群れて陽にあたっていた
下りてきた一人の子
裸足　手にカンカラ一つ
花柄もあせた幼女の着物丈は
膝にもとどいていなかった
お河童　やせた白い顔　大きな目
同学年ぐらいの男の子だった
目が合った――目をそらしてすれ違い
父の後を追ってのぼった
振りむくと　同じ所に立って
こっちをみあげていた
訴えたげな眸　手に空き缶　一つ
敗戦の年　晩秋　上野の山の　記憶

〈評〉深澤さん、敗戦の年の切ない記憶です。石段の日だまりに群れる戦災孤児たちの情景が、鮮やかに浮かんできます。

平和を願って鐘をつく

神奈川県　小柳　倫子

神社の杜の鐘つき堂
「ぼく、昆虫大好きなんだよ」と男の子
手作りマスクもポシェットもカブト虫つき
友だちと四つの小さな手で鐘をつく
この子たちに平和を残したいと
集まった人たちも次々と鐘をつく
みんなで「人間をかえせ」の詩を読む
いつもは静かな杜の中
「にぎやかだね」と神主さんはにっこり
釣り鐘は第二次世界大戦末期「献納」された
村人はじっとがまんした
そして戦後三十年　釣り鐘は
村人の豊穣の願いを込めて再建された
釣り鐘は誰をも拒まず
富士や丹沢の山々を眺めている
ジージーツクツクミーンミン
八月九日のま昼間　必死にセミが鳴いている

小柳さん、神社に梵鐘？　神仏習合の名残か、各地に結構あるようですね。8月9日に「人間をかえせ」の群読、すばらしい。

短歌

鈴木　英子 選

堪え難きを堪え忍び難きを忍べるは何時の世もああ我ら国民　福岡県　佐々木礼子

〈評〉特に最近、戦時ではないが国民にかかる無駄な負荷が多い。玉音放送を心に重ねての怒りは説得力があり、響く。

ゆったりと空見て水呑む鶏の目蓋は下から上へと閉じる　広島県　岩瀬　順治

〈評〉うまいのは空を見る下から上への動作に、瞼の下から上へ被さってゆく流れを重ねたこと。集中した景に引き込まれる。

父も母も灯籠舟にて見送りぬああ故郷の暴れ球磨川　東京都　大沢　津香

〈評〉故郷を思えば寂しくても幸せを感じるだろう。それが天災で思い出もかき消すように暴れる川。心も揺さぶられる。

戦後とはあの戦争を忘れ去ることかと未だ沖縄は問う　大分県　坂本　一光

歴史にも国民の声にも向き合はず改憲にのみ向き合ふこの人　群馬県　氏家　孝

被爆者の言葉途切れて静まれば吾らの全身耳となる音　東京都　山口　信子

踏まれざる草はすっと抜かるるなり踏まれいるもの根張りて抜けず　岩手県　金沢　邦臣

長崎に広島用をコピーしてこころに届かぬ首相挨拶　東京都　金丸　和彦

疲れたる母のごとくに足を垂れアシナガバチは家路をいそぐ　京都市　花守　綾

「敵味方いまだに泣いております」と戦争体験語る人のあり　岡山県　浜口巳喜雄

聞き上手話し上手に会えぬまま傾聴などと言う人に会う　宮城県　矢崎　英敏

残暑とは言えぬ炎暑が続きつつすべて萎びる終戦記念日　岩手県　佐々木清志

復旧の起重機唸り今朝の秋　京都府　木下　淳子

〈評〉近年は異常気象等により災害が絶えない。この夏も集中豪雨で河川が氾濫した。だが、復旧を目指して起重機は動く。その間に秋が訪れ、次は台風が心配である。

言の葉の力は無限沙羅の花　埼玉県　櫻　紀子

無言館の自画像八月十五日　東京都　北野　妙子

水引の花　濁流の最上川　宮城県　菅原　和子

桐一葉老いて失せものしきりなる　愛知県　稲垣　長

もろこしや出ない音あるハーモニカ　香川県　田村　節子

日雷犬が走って行きにけり　京都府　新庄　富美

選挙カー農道走る雲の峰　神奈川県　渡邊　光男

月代や滝口に注連触るるほど　山梨県　柳沢荘次郎

風入れて二人きりなる盆の家　京都市　西川　知子

電柱の支線に尽きる蔓の夏　相模原市　志葉　一途

わたくしと仏五人の夏座敷　新潟市　小川　マキ

茗荷の子五つ六つと冷や奴　堺市　日野　順子

夏空にバトンリレーの声弾む　新潟県　高橋　輝成

俳句

澤　好摩 選

核兵器空はこんなに青いのに　福島県　佐藤　隆貴

〈評〉「核兵器はなくなったほうがいい」というアメリカの若者が多数。戦争を前提にした国家体制が国際的には存続しているが、これを変えていくことが課題。

大国にガツンと言ったことがない　神奈川県　桑山　俊昭

核兵器ダメと安倍さんなぜ言えぬ　広島県　岡本　信也

これからの75年も語り継ぐ　広島市　内野　健一

米の青年7割核兵器要らぬ　広島市　山根　智

世界地図真っ赤に染めてゆくコロナ　北海道　林　義明

GoToと命令されているようだ　福岡県　貫橋　宣夫

慎ましく清く正しく自粛中　長野県　毛涯　潤

日盛りを歩けば汗に溺れそう　神奈川県　都留あき子

クーラーに過重労働強いる日々　神奈川県　本間　勝

風船へこわもて見せる金与正　広島県　野村　賢悟

トンボ取り親が主役で網振るう　東京都　柿沼　昌芳

草むらの一足ごとにバッタ跳ぶ　鹿児島県　清永　進子

ほんものの絆を問うているコロナ　横浜市　小川仙太郎